

PNDSは慢性咳嗽の重要な原因となりうるか？：PRO

兵庫県立加古川病院 耳鼻咽喉科 阪本浩一

後鼻漏症候群 (PNDS) は、欧米の報告では、慢性咳嗽の主要な原因の一つとされている。しかし、本邦では、副鼻腔炎の後鼻漏に対する報告がある程度で十分な認知がされているとは言い難いのが現況である。今回、PNDSの慢性咳嗽への関与について、重要な原因となりうるとの立場から報告したい。

慢性遷延性咳嗽を主訴に、兵庫県立加古川病院耳鼻咽喉科を受信した患者46名に関して、後鼻漏の関与について検討した。46例の内訳は男性18例、女性28例。年齢は、30歳から82歳、平均55.8歳であった。46例中、咳嗽のみを主訴としたもの30例。16例は何らかの鼻症状も訴えていた。このうち後鼻漏感を有するものは24例(52.2%)であった。視診あるいは咽頭スミア上、後鼻漏を認めたのは37例(80%)であった。このうち、視診上で後鼻漏が確認できた例は18例、咽頭スミアにて確認できたものは19例であった。自覚症状との関係は、後鼻漏感を認めた24例中23例で後鼻漏が認められた。その内の13例では、肉眼的に後鼻漏が確認された。一方、後鼻漏感のなかった22例中14例で後鼻漏が確認されたが、肉眼的に確認されたのは4例であった。後鼻漏を原因から検討すると、副鼻腔炎は5例で認められ、4例に後鼻漏感を認め、前例後鼻漏が確認された。また、33例がRAST検査陽性であり、その内17例に後鼻漏感を認め26例(12例肉眼的に確認)に後鼻漏を確認した。これらの症例より、従来咳嗽の原因とされている副鼻腔炎と並んで、アレルギー性鼻炎による後鼻漏の役割を明らかにする必要がある。治療経過含め慢性遷延性咳嗽の原因としての後鼻漏の重要性を示したい。